

あ と が き

自己評価委員会

委員長 篠崎恒夫

ここに自己評価報告書第2集をお届けする。他大学ではなしえない報告をと意図した結果が果して読者の意を満足せしめたかは、いずれ聞こえて来るかも知れない反響を待つ次第である。

他大学ではなしえないといったが、それは本学が単科大学であることからくる特性と言ってよい。意思決定機構が1層であり、そこで起きている大学の研究、教育、管理運営の姿が、本報告書に生の形で描き出されている筈である。いわば、日本の大学の一つのあり方が描かれている。すべてが量でもって律せられようという流れの中であって、大学の質を考える一つの手がかりとして読まれることを期待して止まない。

本集における最大の眼目は、なんといっても第6章「研究活動の個人評価」である。大学にあって、研究こそ最も主体的、主観的領域である。そこに報告書刊行2年目にして踏み込んだのは、5年一巡サイクルの本学の自己評価予定からすれば、早すぎた嫌いが無いではない。もう1、2年先に取り組めば、もっと違った内容の個人評価を載せることが出来たかも知れない。しかし、今の時点で出来る限りの生の研究者の声を社会に発信することの意義は、それ以上に大きいものと確信する。

一方、自己評価報告が一方的、一過的にならないよう、本学では、第1集から「他己評価」（第1章概要）の方式を取ってきた。この第2集においても各種委員会や、事務局機構の自己評価に対して、教官側のユーザーサイドの評価意見を出し合い、かかる相互評価を反映させた最終報告が本報告書の内容となっている。「ユーザーサイド」意見は、まとまった文書として学内に配付され、今後の学内運営に役立てて行くことになっている。

ところで、近年陸続として刊行されている大学の自己評価報告書は、一部市販されているものを除いて、寄贈物として大学の事務局に所蔵され、大学図書館のオープンスペースに置かれて利用されることなく、残念ながら「死蔵刊行物」の運命を辿っているのではなからうか。とすれば、膨大な費用とエネルギーを費やしての結果が無駄に埋もれてしまうのであり、壮大な国民的浪費と言わざるを得ない。本集が一人でも多くの読者の目に触れ、各界各層の批判を仰ぐことが出来れば幸いである。

なお、本集編集に当たっては、下記の自己評価委員会委員が努力を傾注された。記してその労に報いる次第である。

委員長・教授	篠崎恒夫（商学科）
副委員長・教授	片岡正光（一般教育等）
教授	久々湊伸一（企業法学科）
助教授	山本賢司（経済学科）
助教授	行方常幸（社会情報学科）
教授	山田真史（言語センター）
学生部長	秋山義昭
附属図書館長	村山出
事務局長	川崎晃

平成7年3月